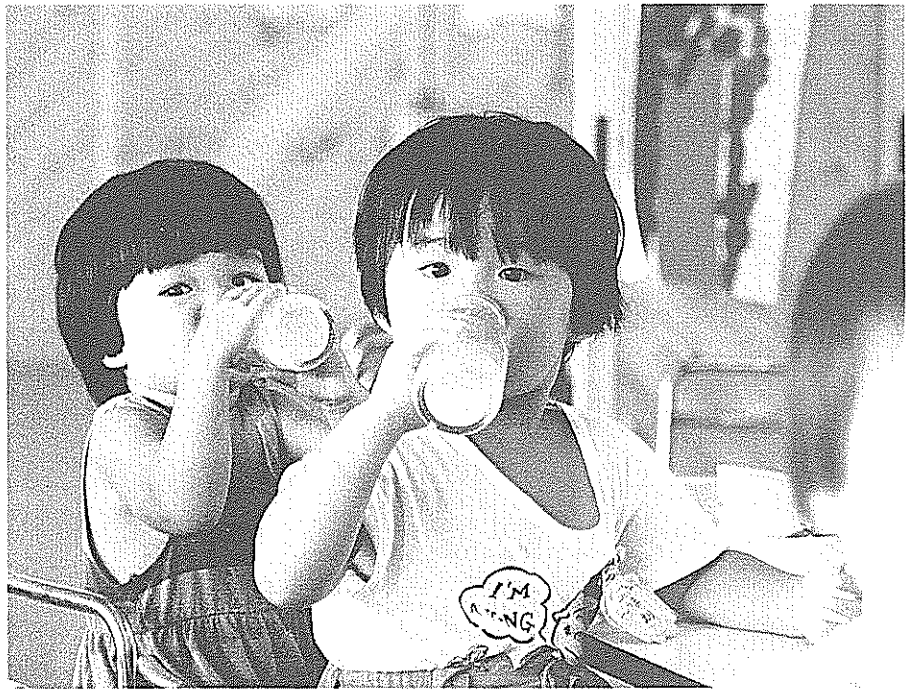


園児の1割に食物アレルギー 6割近くが1歳までに発症

市と調理師部会の調査結果まとまる

現在市内の保育所には、一千三百人余りの園児が通っていますが、ここ二、三年、市内でも新年度を迎える度にアトピー性皮膚炎などのアレルギー児の増加が問題になってきました。アトピー性体質は、十年くらい前から全国的に問題になっている、一定の物質に対する過敏状態を持っている体質のこと。ひどい湿疹(アトピー性皮膚炎)や気管支喘息、アレルギー性鼻炎などの病気にかかりやすく、多くは学童期までに治癒します。これまでアレルギー児については、家族と協議し、簡単な除去給食や弁当の持参などで対処していましたが、増加が続いているため、全市的な対応を検討すべく、市と市保育所調理師部会(徳久千部会長)では、初め

て食物アレルギーについて、全園児を対象にアンケート調査を実施。母親や家庭の影響、アレルギーの症状、アレルギーの原因となる食物など、十二項目にわたって調査しました。今回の調査で、園児の約一割がアトピー性体質であることが判明。母親にアレルギー疾患がある場合は、子供に何らかの影響がある、六割近くが一歳までに発症している、アレルギー(アレルギーの原因)としては卵が最も多いなどの結果が出ました。また、アレルギー児の半数以上が除去食を実施していますが、医師の指導ではなく、家族の判断で行っている例も多く、



(この写真は本文とは関係ありません)

発育についての影響などの危険性があることも明らかになりました。市では、この調査の結果を今後の保育所給食を考える資料として活用することとしています。

